
ロボットのわがまま

豊富銭平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロボットのわがまま

【Nコード】

N6874G

【作者名】

豊富銭平

【あらすじ】

博士が四年もかけて造ったそのロボット。完璧な自信作のはずが、命令された仕事を終える度に何かしらの要求をしてくるのであった。

(前書き)

5月13日に改訂しました。

私の半生を波瀾万丈とよぶ者があつたなら、それは間違っている。波瀾万丈とは、物事の盛衰が激しく変化することで、そのように滅茶苦茶で無計画な生き方は、私の主義に反する。したがって、私の半生を簡素な四字熟語で表すとしたら、一陽来復のさかさまが適当ではないだろうか。

大成功のあとの、大失敗。

みな注目を一身に集めたからこそ、そのミスは際立つ。

各報道機関は、著名人の墮落こそ待ちかねていたのだ、と言わんばかり、私の周りに群がってきた。

人間不信になってしまった私はやむをえなく、生まれ育った町から追い払われるように、外れにある小屋と形容すべき住居で、独り暮らしている。

漁業も農業も、観光地としても目立つたところがない小さな町だが、その中心部には場違いなほどに巨大企業の大手総合電機メーカーがあつた。私は子どものころから、この会社で産業革命を起こすのだと夢みていた。

夢を叶えるには、努力をしなければ。

幸いなことに、電子工学への情熱は溢れんばかりに持て余していた私にとって、百年ちかい伝統と歴史をもつ工業高校や、県下で唯一の工学部がある大学など、この町の施設についてはなんの不満を抱くこともなかった。

大学院で博士号を取得すると、会社の方から勧誘をしてきた。

私は揚々と就職して そのときはまだ、大失敗につながると思つてもみなかった 画期的な大発明を果たした。

この発明によって高額な報酬を受け取り、私の未来は安定した輝きを放つはずだったのだが、結果は前述のとおり。

どうやらこの“博士”という俗称は、時と場合によってはマイナ

スになりうるのだと最近になってわかった。

会社を辞職して地位と身分を捨てたとき、天才の考えることだから自分たちには理解できないのだろう、と町の人々が囁いていたことを私は知っている。まさに偏見の最たるものだ。さらには、この俗称からして、ほとんどの人は白くなつた頭髪を想像するらしい。

たしかに、私も「金持ちお嬢様の笑い声といえは？」なる質問をされると、ぱつと頭に浮かぶのは「おっほっほ」という高笑いではあるが。いくらそのようなイメージをもっているとしても、私はまだ三十代。

イメージだけで老けているといわれては、心外である。

さて、ここまでが前置きです、たとえば、長過ぎるといふ意見があるかもしれない。

私の主張をかいつまんで説明すると、これほど辛い体験をした発明家が、気晴らしにロボットを造ろうと考えるのは、当然の現象ではないだろうか、ということだ。

古くからの親しい友人も、プラトニックな絆で結ばれた恋人も、温かく見守ってくれる両親さえもないのだから、いくらかひねくれた考えも生まれてくる。

技術と知識も兼ね備えているなら、なにを躊躇うことがあつたらう。

プログラムしたことしか実行せず、私の命令に操られるだけの奴隷のような存在。空虚な心をまぎらわすには、自分より哀れなものが必要なのだ。

そんな理屈で、ロボットの外見はひどく醜いものにした。いかにも人間らしからぬ、まるでフランケン・シュタインのようだ。恐ろしい容貌にその巨体は、神話に登場するゴーレムをも連想させる。

起動させると、回路に間違いはなかったようで、プログラムした通りのテキストを読み上げた。

「おはようございます。用件をどうぞ」

やや発音は不自然だが、見た目がこれだ。特に気にする事でもない。

言語を話すなんて、火災報知機でさえ簡単にこなす。せつかくの二足歩行ロボットなのだから、その働きぶりを確認しておこう。

「では、町まで行つて、一週間分の食糧を調達してくれ」

「わかりました」

ロボットは短く返事をする、模範的な“回れ右”をしてドアから出て行つた。

あんな化け物が町に現れたら……。想像するだけで、おもしろおかしい。町の住民たちは慌てふためくだろうか。なにより、店員の接客態度が気になる。きちんとマニュアルにしたがった応対をするか、筈でも武器に追い返すか。

しばらくそんなことを考えているうちに、ロボットは両手にマーケットの袋をぶら提げて帰ってきた。我に返つた私は、さきほどまでの歪んだ邪念を恥ずかしく思い、ごまかすかのように気取つた口調で命令をする。

「どうも、ごくろう。バッテリーを充電して、私が仕事を頼むまで待機していなさい」

ところが、今度のロボットは反抗的だった。

「申し訳ありません、その命令を拒否します。博士は僕の外見を人間らしくしなければいけません。こちらを優先すべきだと、コンピュータが判断しました」

「なんだつて？」私はびっくりして聞き返す。「ロボットが自分の利得を考えるとはい！」

「僕は“博士の為になることだけをする”という基礎プログラムから成っています。人間らしくない、恐ろしい風貌では、普通の人間と関わるのが困難です。これでは、そのうち仕事に支障が生じるでしょう」

たしかに、理屈のうえではそうかもしれない。きつと、今日の買い出しで得たデータに基づいた要求なのだろう。もし、それらしい

ことを言っ て私を騙そうとしているのなら、失敗作ということになる。

まさか。

以前にも似たようなロボットは造ったことがある。私が二度も同じ失敗を繰り返すことはありえない。

絶対的な自信と、もしかしたらという不安が私の心でぶつかり合い、どうにも納得できないまま、渋々ロボットの外見を人間らしく造り直した。

おかげで、このロボットは、私よりもハンサムになってしまったのである。

ささやかな優越感に浸って気をまぎらわすために造ったのに、これでは逆効果だ。私よりも優秀で、おまけに顔までいいなんて。

私は、こいつを二度と使うまいと決心した。

ところが三日と経たないうちに、私はロボットに仕事を任せることになる。

会社を辞めてからの収入源は、ほとんどが新製品の特許料からだ。色々な企業からの依頼で設計図を描き、それを電送する。書類を受け取った重役たちが気に入れば、それは製品化され、企業からの報酬と特許料を得られるというシステムだ。

私のキャリアは誰もが認めるところで、それがマイナスの評価だとしても、あの事件をきっかけに名前は各方面に知られている。

だから、世界的に有名なメーカーから、家庭用ロボットの普及について相談を持ちかけられても、首をかしげることはない。こんな依頼は、ロボットに一通りの家事をやってもらい、その結果を報告するだけで解決する。

こんなことで収入を得られるなんて、うまい話だ。

気楽にのびをしていると、またロボットが気分を害する。

「町へ引っ越ししましょう。このように人里から離れた環境では、そのうち仕事に支障が生じるでしょう」

さすがにこれは、冗談ではない。手間もかかるうえに、今さらどうしてあの町に戻れようか。

「私はこの小屋がいいんだ。たしかに不便なこともあるが、まあまあ満足している。お前はどうもお節介のようだ」

「だめです。博士は町へ住居を移すのです。これは決定事項です」
「この家の持ち主は私だ。お前には何の権限もない。絶対に引つ越しはしないぞ」

すると、ロボットは壁を蹴り始めた。すごい脚力で、何回も何回も同じところを正確に攻撃するものだから、ついには壁に大きな穴があいた。私は大慌てで電源を切ろうとしたが、ロボットは構わず家具や仕事の道具を壊していく。

「わかった！ わかったよ！ 町に引つ越すから、やめてくれ！」
そう言うロボットはおとなしくなった。まるで、デパートでおもちゃを欲しがる子どものようなようだ。しかし、その効果は脅威といってもいいだろう。

町に戻ってしばらくの間、私は住民たちの噂が良い方向に浸透していくまで肩身の狭い思いをしなければならなかった。

ロボットを連れていくことも崇つて、最初のころは悪口ばかりだった。だが、ロボットは家事の手伝いをするだけで安全そうだ、との噂が広がってからは、きつと企業秘密とかの事情があるのだろう、ということになった。

厄介だったのは、私が以前勤めていた電機メーカーが、再び職場に復帰してくれないかと訪れてきたときだ。

まったく、私ひとりをバッシングの標的にしておいて、よくもぬけぬけと。

本心では二十年間も目指していた会社だ、戻りたいに決まっている。それでも、やはり世間は受け入れてくれないだろう。

「僕が調べた情報では、博士一人で仕事を続けるより、復職した方が利益が大きいです。断る理由を教えてください」

心の内に溜めこむより、吐き出したほうがずっと楽になることぐらいは分かっているけれど、ロボットに話して何になる？ そんな苛立ちばかりが募っていく。

黙ってばかりいると、ロボットは再び問う。

「復職を拒む理由を教えてください」

「言いたくない」

言ってしまうべきと、またあの時と同じ惨めな思いをするだけだ。相手が恋人ならともかく、感情もなにもないロボットに愚痴をこぼす気分にはなれない。

「ストレスやフラストレーションは非特異的生体反応からの一般適応症候群や鬱病になることもあり、精神的に好ましくありません。私は博士の役に立ちたいのです。理由を教えてください」

どうして自分がストレスの原因になっていることに気づかないのだろう。

くそ、うんざりだ。

「ロボットの定義を言ってみろ」

私がそう命令すると、ロボットはコンピュータの中から素早く適切な回答を導き出した。

「人間の代わりに労働する精巧な機械”もしくは“他人の意のままに操られる人”」

「お前は私の命令に従えばそれでいいんだ。私が命令する以外のことはしないでくれ」

そのとき、ロボットのしつこい詰問から逃れる絶好のタイミングで、訪問者がドアをノックする音が聞こえた。

私は重たい腰をゆっくりと上げて、玄関へ向かう。まったく、めんどつくさい。

「これだから引越しは嫌なんだ。どうせ新聞の勧誘とかだろう」
ドアを開け、訪問者の顔を見る。それだけで、全身の毛がざわっとして、表情から血の気がひいていく。

そのお客は私より若い精悍な顔つきの男だが、様々な苦労を経た

のだろう、なんとなく老けてみえる。貫禄さえあるようだ。

町へ越した以上、いずれはぶつかる関門なのだど覚悟はしておいたが、まさかこんなにも早く来るとは。話し合いだけで決着がつくだろうか。

「何の御用でしょうか」

悪びれもなくご機嫌伺いをする私に腹をたてたらしい。話し合いという選択肢を捨てたのか、はじめから穏やかに終わらせるつもりはなかったのか、いきなり力いっぱい拳を握って殴ってきた。

一瞬、目の前が真っ暗になる。なにが起きたのか、まるでわからない。そして脳がこの状況を理解すると、観念したような落ち着きをとりもどすことができた。

「わかりました、いいでしょう。あなたの気の済むまで、殴ったらいいい。しかし、あなた、法律上ではかたづいているのですよ。私も償いをしました。まだあなたが暴力をふるうようであれば、それはまた問題です」

そこは、さすがに大人。怒りにまかせて暴れるのは一回限り。男の呼吸は荒々しいままだが、歯を食いしばり、なんとか冷静になるうと努力していた。

「償いですって？ いいえ、あなたは何もしていない。責任を背負うのが嫌で、町から逃げていっただけではありませんか。それが罪滅ぼしといえますか」

「私は責任をとって、会社を辞めました。それまでの裕福な生活をすべて放棄して、陰ながら社会に奉仕してきましたのです。そのところはご理解いただきたい」

男はしばらく考えこんでいた。さきほどの行為を情けなく恥じる気持ちと、煮えたぎる怒りが格闘しているのだろう。そして、どうやらその勝敗は、私の解答に託すことに決めたらしい。

「では、どうして今になって戻ってきたのです？」

ロボットに強制させられて。それだけは禁句だ。真実がためならば、どうしたものだろう。私は答えることができなかった。

会話が途切れたのを不自然に思ったのか、最悪のタイミングでロボットが様子をつかがいに玄関までやって来た。男の内が格闘していた二つの感情は、ロボットの登場により怒りが勝ったようだ。

「この偽善者め！ この大嘘つきめ！ どうして、まだこんなガラクタを造ってる？ なにが社会奉仕だ！ 人殺しの、くそつたれ！」

「まあ、落ち着いてください……」

ほとんど泣き入りそうな声だと、自分でもわかった。家の玄関先で、反社会的な刺激のある言葉ばかり叫ばれては、たまったものじゃない。

「こいつも殺人兵器か。なんにも反省していないじゃないか！ あんたのような人間が、水爆なんかをつくったりするんだ」

この言葉は、前にも聞いたことがある。はつきりと、耳に痛いほど。

「こいつは、前のやつとはちがうのです。私の命令にしか従いません。そうプログラムしました」

「どうせ親父の二の舞だ。いつか、そいつも悪用される。処分するなら、いまのうちだ」

男は素手でロボットに襲いかかった。もちろん、機械の腕力には敵わない。ロボットのコンピュータも、彼を危険だと判断し、追いつそうとする。

「こんなのが一般化してみろ！ パソコンとはちがうぞ、ただ便利なだけでは済まないんだ！ いずれ後悔させてやる！」

その怒声を聞きつけて、近所の住民は何事かと顔を出す。そこにある光景は、人間とロボットが共存できないことを物語っていた。ロボットの太いアームが男の首をつかみ、ずるずると路地へ引きずっていく。

野次馬はどちらが被害者なのだろう、と困惑した表情で、最後は私のほうへ視線を向けるのだ。

また何かしでかしたな。そのような視線を……。

「彼の精神は不安定です。大人なら、このような住宅街で怒鳴ったりはしません」

夜、静まり返った私の部屋に、何度も男の罵声が繰り返されている。ロボットがメモリードライブに録音していたデータを、再生しているのだ。

“後悔させてやるぞ”この言葉は、黙殺してはいけない気がする。あのような男は、何をするかわからない。

「それだけの理由で怒っていたのではないんだよ。私がまだロボットをつくっていると知ったから、あのような癩癩を起こしたんだ」

しばらくロボットは言葉の意味を考え、そして尋ねた。

「何があつたのか、教えて下さい」

これ以上、悪くなることがあるだろうか。私は考えた。今が最悪だ。機械相手に話しても無意味だが、だからこそ話しやすいかもしれない。そして、口を開く。

「二十世紀のSF作家が作中で書いた“ロボット工学三原則”というものを知っているか？ ロボットは人間に危害を加えてはいけないとか、この条例に反しない限り人間の命令に服従しなければならないというものだ」

しばらく、インターネットから情報を引きだすため静止した後、ロボットは答える。

「正確には人間の危機を看過することも許されていません。もちろん、僕にはこの原則は適用されていません」

「そう、お前はいいのだ。私の命令にしか従わないようプログラムされてあるからな。問題は、もう一つ前の、あの会社の命令で作ったロボットなんだ。私は所詮フィクションのはなしだから、特に気にする事でもない”人間の命令に服従しなければならぬ”というプログラムだけを与えた。それが失敗だった」

賢いロボットは、この話がどのような結末におわるのか、的確な予想をしたらしい。

「つまり、そのロボットは、人間に危害を加えたわけですね」

「ああ……、昼に訪れた男の父を、殺してしまった。私が命令したのではない。産業開発部の、私の直属の上司だ。男の父は、ライバル企業の重役で、上司は彼をうまく消せば昇進できると考えた。しかし、その命令も、ロボットの解釈もまずかった。ロボットは目撃者が多くいるなか、重役を殺し、上司は逮捕、ロボットは処分されることになった。警察としても異例の事件で、私はお咎めなしにすんだが平気でいられるわけがない。遺族はなんの罰も受けていない私を恨み、町のみんなもそうだ。そして私は町を出たんだ」

しばらくの沈黙。ロボットは感情を機械的に読み取ることしかできない。なにを言っても慰めにはならないとわかっているから、あえて黙っているのだろう。

それにしても、気まずい。自分から白状したものの、聞き手に感想を言ってもらわないかぎり、話が展開しないのだ。そんな雰囲気、ロボットも察した。もちろん、自分で気がついたのではなく、情報を収集した結果だろう。

「人間は、このようなとき、お酒を飲んで気をまぎらわすものではないのでしょうか」

「いったい、どこからもってきたデータなのだろうか。思わず笑みがこぼれる。たしかに、そうだ。しばらく禁酒してきたが、なんとなく気分がすっきりしたことだし、久しぶりに酔いですべてを忘れるのもいいだろう。」

「そうだな、ちよつと自動販売機で買ってくるよ」
「僕も付き添います。夜道は危険です」

もしもロボットが一般家庭に普及したと仮定して、ロボットはやはり人間以下の扱いをうけるのだろうか。

昼間の男が暗闇から飛び出してきて、鉄の棒でロボットを殴ったとき、ふと私の頭に浮かんだのはその程度のものだった。

映画なんかも観たことがある。復讐とは、恨みの矛先を向ける相手より、まずはそいつの親しい人間を攻撃するものだ。家族や

友人が自分のために傷ついたことを知った主人公は、隙だらけになり、クライマックスまではしばらく、悪役にやられる。

さすがに、映画の悪役よりかは男の動機は正当なもので、私にまで襲いかかってくることはなかった。自制心を失うほどの乱心はしていないらしい。

後頭部を殴られたロボットは、主電源をやられてしばらく倒れていたが、予備の電源を起動して起き上がり、すぐに男を扉に押し付けた。

「携帯している武器を捨てなさい」

悔しさと恨みの混ざった醜悪な顔で私を睨みつけてから、男はゆつくりと鉄の棒を手放す。私はそれを拾うと、護身用にとズボンにさした。

「残念だが、これは犯罪だ。私も身の安全は第一に考える。いつ、あなたが襲ってくるかわからないような状況では、物資を調達することもできない。警察に出頭してもらおうよ」

また、昼間のように痲癩を起こすかと思いきや、男は狂ったように笑い出した。

「イタチの最後っ屁さ。あんたが勤めていたあの会社に、簡易爆弾を仕込ませておいたよ。もうじき、爆発するはずだ」

「なんだと？」

ロボットに嘘発見装置はついてない。私も、追い込まれた人間がどのような行動をとるのかなんて、今まで考えたこともなかった。最後に私たちを慌てさせてやろう、とまったくの嘘を言っているのであればよいのだが、万が一という場合もありうる。

なにが最善の策なのだろう。

「簡易爆弾といっても、ガス管のちかくに忍ばせておいたから、けっこうな被害がでるはずだ。早く行って処理しないと、取り返しのつかないことになるぞ」

さあ、どうする。要約すると、こう言いたいのだろう。まったく、急ぎたてないでくれ。

「博士！ 僕は自由に行動することを許されていません。命令をください」

ロボットまでもが、主人の無力さを肯定するように、指示を催促してきた。

こいつに爆弾処理を頼んだところで、うまくいくのか？ ただの家事手伝い用ロボットだぞ。

こんなときのために、警察や消防というものがあるのだ。この男が本当のことを言っているのなら、機動隊を出動してもらえばいい嘘だったとしても、立派な恐喝だ。犯罪として対処してもらえらるろう。

それに、なにより、ロボットが消防隊より迅速な対応をして、爆発を防いだらどうなる？ 爆発が起きたとしても、人間なら救えなかったはずの要救助者を、ロボットが果敢に救出したら？ 世間はきっと、消防もロボットに任せられた方が確実だと判断する。

もし、そうになったら、消防士という仕事はどうなる？

「……待機だ。警察と消防に連絡して、この男は逃がすな」

自分は弱虫ではない。個人がこれほどのロボットを造れるのだ。きっと雇い主の大手電機メーカーなら、もっと最新の防災設備が導入されていることだろう。自分はただの一般人で、社員ですらないおとなしくしているべきだ。

罪悪感はある。自分のことを情けなくも思う。この男が私をどう見ようと知ったことか。私にいつたい、なにができる？

「博士、あなたは天才です」ふいにロボットが、私の心中を見抜いたようにそう言った。「そして僕は、天才によって造られた最高の万能ロボットです。食糧の調達もできます、あなたを町に戻すこともできます、あなたの心の葛藤も理解できます。しかし、僕は博士の命令なしに外出することすらできません。僕はあなたが思っているより上手くやれます。二度と同じ失敗はさせません。命令を下さない」

これまでわがままばかり言って主人を困らせたポンコツの機械

のかたまりが、どうして私の目を覚ますことができたのだろうか。

こんなプログラムはしていない。“博士の為になることをしなければならぬ”これだけの基礎プログラムが、私を慰める行為にまで発展したのだ。

「お前はすぐにビルへ向かうんだ。私のスピードにあわせなくても、よろしい。この男の身柄を警察に渡してから、私も向かうとするよ」命令を最後まで言い終えたと確認すると、ロボットは自動車のように走り去った。

はたして、間に合うだろうか。この不安だけは、どうしても拭いきれない。

途中、パトカーと消防車が私を追い越していった。

しばらく山の近くで生活していたからといって、ほとんど小屋にこもっていたのだから、足腰が鍛えられるわけもなく、ようやく会社のビルが見えてきたとき、私はみつともなくせいぜいと息をきらしていた。

そろそろ爆弾は見つかっただろうか。嫌な予感というものは、的中するものである。あの男が白状して、十五分。いつ爆発してもおかしくない。

そして、ついに小さな花火があがった。

ガス管の傍と男は言ったが、どうやら最悪の事態だけは免れたようだ。その花火は、会社の屋上からだった。すべての窓は固定されていて開かないため、空中に投げ捨てることはできなかつたらしい。ロボットはどうなったのだろうか。

ようやく野次馬の群れを押しつけて、会社の敷地前に辿りついたとき、その答えは絶望となって空から降ってきた。

人間のように、最後まであがいたのか。屋上で爆発したとき、ロボットはそこで解体作業をしていたのだ。簡易爆弾と男が言っていたから、すぐに解体できる自信があったのか。

地面に激突し、右腕がもげる。

野次馬は悲鳴をあげ、私はべつな言葉を叫びながら、消防隊の制止を振り切ってロボットのもとに駆け寄った。

「おい！ どうして屋上から投げ捨てなかったんだ！」

ビルの中からはそれができなくとも、屋上となればできたはずだ。タイミングを計って投げれば、なんの被害もなく済んだはずなのに。「すみません、博士。任務を完全に終了することはできませんでしたが、被害は最小限に食い止めました。解体に取りかかったのは、爆発が起きると群集はパニック状態になるかもしれない、という私の判断でした」

そう謝るロボットの音声は、カウボーイが白黒テレビの中を走り回っていた頃まで、技術が遡ったかのようにだった。

「そんなことより、自分の身を心配しろ」

「僕の災害報知プログラムから、データが送られてきました。一度、全プログラムをシャットアウトすると、再起動することはないですよ」

ロボットの顔面は、今まで以上に醜く、メッキのほとんどが剥けている。人工の毛も焦げ、内部のコンピュータが穴を通してみえる。「最後のわがままを聞いてください。そして、博士はそれを叶えるのです」ロボットの目が、チカチカと点滅をした。そろそろバッテリーが切れるというサインだ。「博士、あなたは会社に復職するのです。今の生活環境では、様々な可能性を無駄にすることでしょう。かつての過ちを償うべき人間は、あなたではありません」

私は、顔が濡れていることによくやく気づいた。これが、久しぶりに走ったことによる爽やかな汗なのか、涙なのか、それは定かではない。

ただ、このロボットは失敗作ではない、その思いだけははっきりとしていた。

「せつかく入った会社を他人の為に辞めるほど無欲な私だが、今夜だけわがままを言うよ」

私はロボットの手を握った。

その手は、人間のような温かみもなかったが、機械のように無感情を体現する冷たさもない。火傷しそうなぐらいに、熱かった。それでも、私は決して熱せられた金属を離そうとはしなかった。

「お前は自己犠牲の精神でカッコ良く終わりにしたいのかもしれないが、私がそうはさせない。きっと、お前を修理してみせる。つぎに目が覚めたときは、せつかくの新居ではなく、豪邸かもしれないぞ」

そして、ゆっくりと、ロボットの目から光が消えた。

私の人生を四字熟語で例えるとき、一陽来復のさかさまというやつがあるが、それは間違っている。

また、ときに波瀾万丈とよぶ者もあるが、まあ、なかなか上手い言い回しだ。

(後書き)

短編らしくできるだけ短くしようと内容を削ったため、
読んでいて不自然な箇所があるやもしれません。

感想、評価いただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6874g/>

ロボットのわがまま

2010年10月8日13時56分発行